

公開保育の取り組み事例

自治体 兵庫県神戸市

参加のハードルを下げ、 公・私、園種を超えた公開保育で 市全体の保育の質を高める

取り組みの ポイント

- 0～2歳児を対象とし、公・私の別や園種を超えてともに学び合う公開保育を実施。市内のすべての園の保育の質向上を図る。
- 保育を見学する視点や話し合いのポイントを明確に定めて、公開保育を通じた参加者全体の学びが深まるようにする。

✕ 子どもの姿を共有して対話を深め、保育者の専門性を高める ✕

公開保育実施園の負担を減らし 多くの園が参加できるしくみをつくる

9つの区を擁する神戸市のこども家庭局では、各園の個性を尊重しつつ、要領・指針*に沿った保育を実施していくことをめざしています。そのため、公立保育所所長を市の課長級として待遇したり、保育経験者を職員として多数配置したりすることで、実態に合わせた施策を検討しています。

2018年には0～2歳児の保育の質の向上を図るため、神戸大学と共同研究を行う乳幼児保育研究部会を設置。自身も保育士や保育所所長を経験してきたこども家庭局の北林久仁子部長は、次のようにねらいを語ります。

「要領・指針で保育所が『幼児教育施設』と明記されたことを受け、国の方針と現場の実践をつなぐことが重要だと考えました。また、待機児童対策によって増加した園が、ともに学ぶ環境をつくりたいという思いもありました。3歳児以上の保育は各園が培ってきた特色や文化の違いが大きく、



お話しくださった方

神戸市 こども家庭局
北林久仁子部長

同じ土俵で語り合うことに難しさがあったので、まずは0～2歳児の保育に着目して質の向上を図り、土台を固めていきたいと考えたのです」

同部会の柱となる活動の1つが、0～2歳児を対象とした公開保育です。区ごとに4園からプロジェクト委員を選出し、同委員が中心となって各区の公開保育を計画、設営します。公・私を問わず小規模保育事業も含めた多くの園に実施を呼びかけており、毎年、各区から4園ずつが公開保育をするサイクルをつくりました。公・私幼稚園教諭の公開保育への参加も呼びかけるほか、オンライン会議ツールを活用して、離れた場所からも参加できるようにしています。

公開保育では、実施園の負担が増えないように

*幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を指す。

図 公開保育当日の流れ

9:30	受付
9:40	オリエンテーション
10:00 ↓ 10:45	公開保育見学
11:00	担任の振り返り 園への質問 グループワーク
12:00	全体会
12:30	終了



子どもの姿を通して、気づいた点を出し合って話し合いを深めます。実施園は、普段当たり前にしている実践が認められることで、その価値に気づくケースも多いといいます。実施後には、「新しい視点に気づけた」「同じ悩みをもつことを知って共感した」などの感想が寄せられます。

工夫を凝らしします。

「事前につくり込んだりせず、普段通りの保育を公開すればよいことを伝えています。指導案も、A4判1枚程度に当日の保育の流れや見てほしいポイント、保育者の願いなどを説明する簡潔なものにして、準備の負担を軽減しています」（北林部長）

リアルタイムの子どもの姿を通して 参加者・実施園ともに学びを深める

公開保育当日は、実施園が保育のポイントを伝えるオリエンテーションを行った後、45分間の保育見学に移ります（図）。参加者は「子どもの姿を中心に見る」という約束事に従い、保育のしかたや保育者の動きではなく、いつ、どの場面で子どもの心が動いたかなどを観察します。

見学後は担任が振り返りを伝え、付せん紙を使って意見を出し合うグループワークを実施。ここでは、①保育者のかかわりや環境構成などのよかった点、②自分ならこうするという点、③質問事項の3つを中心に話し合います。

「『公開してよかった』と思ってもらうためにも、よかった点を認め合うことを大切にしています。ただ、1年目は参加のハードルを下げようと褒めることに終始したため、話し合いが深まりませんでした。そこで、翌年からは、自分ならこうするという点への意識を高めています。この観点は否定や批判のニュアンスが生じやすいため、参加者への注意を促しつつ、プロジェクト委員などが話

し合いに加わって、常に実施園をリスペクトした議論となるように配慮しています」（北林部長）

参加者が目の当たりにした子どもの姿を共有しながら話し合いを深め、さまざまな視点を取り入れて、参加者・実施園ともに専門性を高められることが公開保育の大きな利点です。

「少し気の弱そうな2歳児が、取られたおもちゃを返してと相手の子どもに必死に訴えていたとき、その手は大好きな保育者の手をしっかり握りしめていました。その安心感があるからこそ、自分の意思を伝える挑戦ができたのでしょう。参加者がそうした場面を目にすれば、座学で理論を学ぶよりもアタッチメントの大切さを実感できるはずです。このように子どもの心の動きをリアルタイムで捉え、みんなで共有すれば、参加者は理解を深め、同時に実施園の保育者も自身の専門性への自覚を深められます。まさに公開保育でしか得られない学びだと思います」（北林部長）

保育とは、子どもも環境も動き続け、ときに想定外の対応が必要になる中で、どう支えたとねらいに基づく子どもの育ちが実現できるかを考え続ける営みです。多くの保育者が異なる視点から意見を出し合うことで、学びは深まっていきます。

「たくさんの参加者の視点を自分の中に取り込み、保育の引き出しを増やしていくことが、個々の保育者の専門性を高めていきます。そうした保育者が集まってそれぞれの強みを生かせる環境が整うと、園としての専門性が高まり、保育の質を向上させるのだと考えています」（北林部長）

公開保育の取り組み事例

園 タンポポこども園（京都府・私営）

公開保育で他園と学び合い 保育者の専門性を高めて めざす保育を創り上げる

取り組みの ポイント

- 公開保育の実施にあたり、園の理念などを改めて話し合い、保育の方向性を共有。公開保育の参加者の意見や助言をもとに、実践を見直し続ける。
- 園内にとどまらず他園の公開保育を見学して、よい点を積極的に取り入れ、子ども主体の保育を充実させていく。

× 日常の保育を改善する学びの場として公開保育を実施 ×

0～5歳児の各クラスが 主体性を重んじる保育を公開

京都府舞鶴市のタンポポこども園は海や里山が近接する地にあり、周囲の豊かな自然を生かしながら、子ども一人ひとりの主体性を重んじる保育を実践しています。もともと児童養護施設の一角にある子育て支援施設として出発した経緯があり、今も家庭的なぬくもりを感じられる園の風土づくりを大切にしています。

同園は2024年11月に公開保育を実施しました。舞鶴市では、市全体の保育の質を向上させる目的で、2013年度より公・私や園種などの違いを超えた公開保育を継続しており、同園での実施は今回で3回目になります。

公開保育の当日は、市内から保育者を始めとした幼児教育関係者約40人が集まりました。初めに1時間ほど0～5歳児の各クラスの公開保育を見学した後、担任による振り返りやグループワークなどを通して学びを深めました（図）。



園長
くわはらまちこ
桑原町子先生



副園長
とがわまさよ
戸川政代先生

主任
ゆきなげけいこ
行永恵子先生

主任
よしむらあき
吉村亜希先生



各クラスの公開保育では、参加者は子どもの姿や遊びの様子を記録シートに書き取りながら見守りました。同園ではコーナー保育*の環境を整えて、子どもが興味をもったことに意欲的に取り組める支援を大切にしています。この日も、例えば4歳児クラスでは、自作のアクセサリを身につけて

*さまざまな遊びのコーナーを作り、子どもが自分で選んだ場所で遊べるようにした保育のこと。

アイドルになりきり、ステージショーを楽しむグループや、友だち同士で意見を出し合って大きな紙に街を描く活動を楽しむグループなど、子どもが好きな遊びに生き生きと打ち込む姿が見られました。その横で保育者は、子どもたちに寄り添い、一人ひとりの表情や姿を注意深く観察しながら遊びを広げたり、深めたり、子ども同士をつなげたりする支援を行いました。

見学後に行われた担任による振り返りの冒頭では、園長の桑原町子先生が次のように話しました。

「公開保育に向けて保育者は何度も話し合い、子どもの姿を重ね合わせて保育環境を整えてきました。思い通りにならないこともあります。それでも保育の面白さだと改めて感じながら、チームとして保育の質を高めることをめざしています」

参加者の希望に応じたグループで各年齢の保育について語り合う

各担任が当日の保育について、自身の抱える課題も含めて振り返った後は、参加者が希望する年齢ごとに分かれて、約45分間のグループワークを実施。各グループは椅子を円形に並べて座り、全員のひざの上に直径1mほどの丸型の段ボールを置いて、その上の模造紙に意見を書き留めていきました。段ボールを脚のないテーブルとして使うことで、参加者間の身体的な距離がおのずと近づき、まさにひざを突き合わせた状態で、活発な話し合いが展開されました。

話し合いのテーマは、「保育者のどのような支援から気づきや学びを得たか」ということ。子どもの姿を通して語り合い、例えば、次のような発言が聞かれました。

- 子どもが歌を歌いたいと言ったとき、保育者がすぐに子どもと一緒にステージの準備を始めた支援が素敵でした。
- 街づくりは継続性のある遊びで、廊下に作品が置かれていて、興味をもった他年齢の子どもも参加しやすいと感じました。
- どの子どもも自分で遊びを選んでいる姿が印象的



公開保育の流れ

タンポポこども園が話し合いを重ねながら実践する、子ども主体の保育を公開。事前に、環境構成や予想される子どもの姿、保育者の支援と配慮などをまとめた指導案を配布しました。保育者をリスペクトする、参加者の穏やかなまなざしの中、公開保育が行われました。

① 保育見学

当日の保育は、前日から続く遊びや活動が展開されていたため、子どもたちはとてもリラックスした様子。ときには見学者にも話しかけて、一緒に遊びを楽しもうとする姿が見られました。



② 担任による振り返り

各年齢の担任の保育者が当日の保育を振り返りました。事前のねらいや、想定に対してどのような姿が見られたかや、自身の課題などを語り、その後のグループワークにつなげました。



③ グループワーク

担任の保育者を囲む形で3～6人ほどのグループを構成。参加者一人ひとりの意見や感想をもとに、それぞれが印象的だったことなどを語り合って議論を深めました。




④ 総評

各年齢の実践や保育者に対して、神戸大学大学院の北野幸子先生による総評が行われました。

でした。

- 子どもに対しての言葉がけが、とても優しくて穏やかだと感じました。
- コーナー作りによって遊びが広がっていると思いました。

各グループでこうした意見が交わされる中で、「そんな意図があったんですね」「自分も試してみ



たい」「こういう場合はどうしますか？」など、話し合いもどんどん深まりました。

最後に、10年近くにわたり舞鶴市の保育研修のアドバイザーを務める神戸大学大学院の北野幸子先生が、各年齢の保育で気づいたことや担任の課題への助言を述べた上で、次にめざしたいビジョンを語りました。

「子どもたちのたくさんの笑顔の裏で、各クラスの先生方が子ども目線で『もっと楽しく、もっと

使いやすくするには』と深く考え、環境を構成していることがさまざまな場面から感じられました。保育者の専門性をさらに向上させるために、次のフェーズでは、『こんな姿が見られるかな』といった予測をはるかに超える子どもの姿が表れたとき、それを歓迎して楽しめる保育へと発展させてほしいと思います。今日は素敵な保育の実践を公開してくださって、心より感謝しています」

✕ 他園との学び合いが、保育者を成長させる大きな力になる ✕

参加者の意見や助言が 保育の再確認や自信につながる

同園では5年ほど前に、いわゆる設定（一斉）保育から子ども主体の保育へと、大きく舵^{かじ}を切りました。しかし、コロナ禍を挟んで思うように進まなかった面もあり、今回の公開保育の実施にあたっては戸惑いもあったと、副園長の戸川政代先生は話します。

「職員の入れ替わりもあり、子ども主体の保育が十分に根づいていないと感じていたため、もう少し実践が整ってから公開したいと思いました。舞鶴市乳幼児教育センターのコーディネーターの方にその考えを伝えると、『だからこそ公開して、参加者から意見をもらおうとよいのでは』と、背中を押される形で実施を決めました」

舞鶴市では、公開保育が日々の保育を見直すための通過点となるよう、入念に準備をした保育ではなく、ありのままの保育を公開することを推奨しています。同園でも基本的には日常の保育を公開する考えでしたが、「どのような子どもの姿を見てもらいたいのか」「保育のねらいをどんな言葉で伝えるか」などを話し合う中で、子ども主体の保育について改めて見直す機会になり、環境構成をさまざまに試行錯誤しました。公開保育の前には乳児と幼児の保育者に分かれて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）の読み合わせをする研修も行ったといいます。

今回の公開保育を通して、たくさんの気づきがありました。保育者が自信を深める機会にもなったと、主任の行永恵子先生は話します。

「保育を変えていく過程では、自身が考えて行う保育に迷いが生じます。参加者の方々から多くのご意見をいただき、『このやり方で間違っていないようだ』『当たり前に行っていたけれど、すごいことなのか』などと自信や励みになったようです」

一方で、改善すべき点も多く見つかったといいます。

「室内でしっかりと遊び込めていた半面、子どもが自由に外遊びを選べる環境が十分に整っていなかったというご指摘があり、その通りだと思いました。この先、子ども主体の保育を進めていく中で、見直しを図りたいと思います」（戸川先生）

他園の公開保育に参加して 現場視点での気づきを持ち帰る

これまでも保育の実践を見直す際には、他園の公開保育が契機となり、大きな学びを得てきました。以前は桑原園長が見学することが多かったのですが、現在は現場の保育者が参加しています。

「園長の私が他園の実践を見学して『うちでも取り入れたいな』と思っても、園に帰り、日々懸命に子どもと向き合う先生方を見ると、説得力のある形で『ここを大きく変えましょう』とは伝えづらいと思っていました。そこで、先生方に参加し

廊下に広げた大きな紙に、自分の頭の中にある街のイメージを描き続ける様子。近くを通りかかった子どもが参加する場面も見られました。



部屋にはさまざまな材料が子どもの手が届く場所に用意されているため、子どもが「あれを作りたい」と思ったときに、すぐに遊びにつなげることができます。



手作りのマイクを持ち、ステージの上でノリノリで歌う子どもたち。保育者のサポートを受けつつ、あくまでも子どものアイデアを起点にした遊びが展開されていました。

てもらい、現場の視点から『これは取り入れられそう』といったアイデアを持ち帰って、提案してほしいと考えました」(桑原園長)

舞鶴市では公開保育を、参加した保育者が学んだ内容を園に持ち帰って共有し、実践に生かす「往還型研修」として位置づけています。同園でも職員会議や園内研修などの場で情報を共有し、「この実践がとてもよかったので、保育の中に取り入れられないか」と話し合い、保育の見直しに生かしてきました。主任の吉村亜希先生は次のように話します。

「保育を変え始めた当初は、『子ども主体の保育とは具体的にはどういうものだろう』というモヤモヤした気持ちがありました。そうした中、他園の実践を見ることで多くの気づきがあり、保育の見直しが進んでいきました」

物作りの遊びに使える多様な材料を用意して、子どもが自由に選び取れる環境も、他園の実践を

参考にして整えました。また、以前はおやつ時間を一斉に取っていたため遊びが途切れることがありましたが、今は子どもの好きなタイミングで取れるようにするなど、時間の使い方も一人ひとりの思いに合わせています。

子どもに対する声のかけ方も変わりました。

「次の活動に移りたい場面では、全員に聞こえるような大声で『さあ、片づけて』と指示をしていました。ところが、ある園では一人ひとりの遊びの様子を見ながら、『これが終わったら片づけようか』などと優しく語りかけていたのです。子どもの思いをととても大切にしていると感じ、取り入れるようにしました」(戸川先生)

子ども主体の保育が浸透するにつれ、保育者はいっそう保育を楽しめるようになったといいます。

「以前は次の活動の準備に追われていましたが、今は子どもの遊びを一緒に楽しむ気持ちになれたことが、大きな変化だと思います」(行永先生)

同園ではこれからも市内の園同士が学び合う環境を生かして、保育者の専門性を高め、保育の質の向上をめざしたいと考えています。

「保育の仕事はすぐに結果が見えるものではありません。それでも、人格の根っこをつくる大切な時期に子どもをお預かりしているという自信とプライドをもって、子どもや保護者に寄り添っていききたいと思います」(桑原園長)

幼保連携型
認定こども園
タンポポこども園

「子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくりだす力の基礎を培う」を理念に、子ども主体の保育を展開。2020年、認可保育所から幼保連携型認定こども園に移行し、より多くの子どもを受け入れている。

◎ 園長：桑原町子先生
◎ 所在地：京都府舞鶴市泉源寺立田 223
◎ 園児数：93人